地域と協同の研究センターNEWS

2025年7月25日発行
251号

2025 国際協同組合年　「協同組合は地域にどう関わるか」

6 月 21 日（土）に生協生活文化会館にて協同組合のアイデンティティ・連続セミナー第一回が開かれました。

「協同組合のアイデンティティ」とは

協同組合は 19 世紀後半に誕生し各国・地域に広がっています。世界に共通する「協同組合とは何か（定義）」は ICA（国際協同組合同盟）という国際組織で決めています。1844 年にイギリスで誕生した「ロッチデール公正開拓者組合」の運営方法に倣った「協同組合原則」から始まり、約 30 年に一度見直されてきました。1995 年の ICA100 周年大会で採択された「協同組合の定義・価値・原則」を表した「協同組合のアイデンティティ声明（以下声明）」が最新のものです。変更する場合は、変更を ICA 総会で提案し、大会を開いて協議したうえで次の総会で決定する手続きが取られます。

見直しを含む協議と各国の意見

世界は 1995 年から、新自由主義のグローバルな競争、気候変動、デジタルなど新技術、格差・分断・紛争の広がりなど、大きく変化しており 2021 年の ICA ソウル大会で「声明」の世界的協議が呼びかけられました。

世界各国・地域から ICA に 28 の意見が出され、日本では、JCA（日本協同組合連携機構）、日本生協連、NPO 地域と協同の研究センターから見直し案を提出しました。意見を受けて 2024 年 ICA インド総会で「声明」見直しを含む協議を行うこと、そのための大会を開くことが決定されました。今回のセミナーは、ICA から出された「改定素案」について話し合うために開催しました。

連続セミナー第一回のテーマ

「改定素案」は今年 4 月に示されましたが、日本からの意見は大半が反映されています（JCA や地域と協同の研究センターから「協同組合以外の組織との協同」を盛り込む提案をした点については採用されていません）。セミナーでは、改正素案を紹介した後、三つの分野・5 人のパネラーからの報告があり、意見交換しました。

問題提起：「地域社会への積極的関与をどう受け止めるか。

JCA 前田健喜部長より、「改定素案」では「定義」は変更がなく、「価値」及び、協同組合が価値を実践する指針である「原則」の変更が示されていること、その中で、**第 7 原則が、地域社会（コミュニティ）への参画【Community Engagement】組合員に支持された責任ある事業の遂行と政策を通じて、協同組合は、事業を展開する地域社会の幸福【well-being of the communities】と、すべての人びとのための平和**

地域と協同の研究センターNEWS	
1 日（火）常任理事会、名城大学法学部「ボランティア入門⑬」 3 日（木）第 1 回協同の未来塾 4 日（金）中京大学「ボランティア⑫」 7 日（月）三重地域懇談会 8 日（火）名城大学法学部「ボランティア入門⑭」 9 日（水）生協の未来のあり方研究会 10 日（木）組合員理事ゼミナール 11 日（金）中京大学「ボランティア⑬」	12 日（土）東海交流フォーラム実行委員会、理事会 14 日（月）国際協同組合デーｉｎ愛知 15 日（火）名城大学法学部「ボランティア入門⑮」 18 日（金）労働者協同組合トークイベント、中京大学「ボランティア⑭」 19 日（土）第 1 回マイスターコース 25 日（金）中京大学「ボランティア⑮」 26 日（土）とうかい食農健サポートクラブ総会記念企画 29 日（火）三河地域懇談会

目次

2025 国際協同組合年「協同組合は地域にどう関わるか」	1	
職員の学びの場が始まりました	3	
HOMI わいわい農園見学交流会を開催	4	
難民食料支援を通じた多様性への配慮と協同のプロセス	5	
情報クリップ	6	
書籍紹介　コモンの「自治」論	8	

訃報　地域と協同の研究センター顧問・コープぎふ元理事長の水野隼人様が７月６日にご逝去されました。８ページに訃報を掲載いたしました

で公正かつ環境的に持続可能な未来のために活動する」と補強（下線部）されたことについて説明され、各パネラーへの問いが出されました。

（参加者アンケートより）「地域社会への関与の強化という言葉が、イメージしにくかったのですが、「ローカルな地域社会の幸福」とグローバルな「平和で公正、環境的に持続可能な未来」を目指すために地域社会へ関わるということで、少しイメージできました。」

討議テーマとその背景

討論テーマの三分野は、地域社会に積極的に関与する際、世界の中での日本の特徴を示しています。①小売・流通サービスの質と競争環境、②急速な少子化と超高齢化及び人口減少、③気候変動による豪雨災害や南海トラフ地震など巨大災害の多発です。いずれも「平和で持続可能なコミュニティ」を脅かす要因に相当します。

(1) 流通・小売・サービスが発展し、競合（競争）が進んでいます。昨年「世界 11 の生協」を分析した本が発行され、この 20 年で北欧や欧州の消費生協は大変な困難に直面していること、地域密着性や組合員のつながりで再生していること、韓国と日本の生協も危機を乗り越えた事例として紹介されています。

第一討論：「生活協同組合コープみえから」では、地域生協の実践が報告されました。コープみえ鈴木稔彦理事長は、「第七原則が加わるまで、なぜロッチデール誕生から150年もかかったのか」と投げかけ、よりよい社会をめざす協同組合という固有性を自覚すること、事業の成果を社会的な評価軸で図る必要性を指摘しました。

（参加者アンケートより）：子ども食堂の話の中で、「子ども食堂の開催だけでなく、子ども食堂の必要のない社会を目指すこと、どちらも考えていくべきなのではないか」ということに、ハッとさせられました。また「事業として何を評価すべきなのか」という話は、深く考えなくてはいけない問題だと思いました。数字には表せない、その地域の人々にとっての利益を、きちんと考えられるような評価の仕方は、これからますます重要になってくると思いました。

(2) 急速な少子化と超高齢化が進み、人口減少が始まっています。日本は、戦争や紛争に依らない理由による人口減少率ランキング１位です。

第二討論：「協同の縁交流会」から、では、人口減少が進む中山間地域や地方都市で、拠点となる商業施設(Ａコープ)が閉店した跡に、地域住民とともに地域活性化に取り組んでいる農協職員や組合員の取り組みが報告されました。

昨年からスタートし、横のつながりを急速に広げている「協同の縁交流会」の中心となっている、廣田令寿さん（高山市・JA ひだ)、加藤久美子さん（新城市・JA 愛知東)、福田真由美さん（滋賀県日野町・JA グリーン近江）から、「地域にある課題に対して、組合員・職員・住民が共通した目的に向かって協同できているか」「持続的であるには、資金が先でなく自発的な人の力が重要であること」などが指摘されました。

（参加者アンケートより）：「共生・共働・共助が十文字になる形での地域づくりが必要」「協同組合は地域でしか仕事が出来ない」「組合員と職員がお互いに対話し理解を深める必要がある」「自走していけるための組織基盤づくりが必要」と、3JA の話で生協とは違った協同組合のあり方だと感じました。このような機会に学ぶことができありがたいです。」

(3) 太平洋プレート移動による歪みや地球温暖化による海面温度上昇で、巨大地震や集中豪雨など大規模な自然災害が繰り返されています。

第三討論：「大規模自然災害と生協への期待」では、愛知に拠点をもつ災害支援 NPO の栗田暢之さん（NPO レスキューストックヤード代表理事）から、東日本大震災・能登半島地震など各地の災害現場の現地支援、また広域避難者支援において、災害支援に参加してきた生協に対するつよい期待が示されました。災害時と平常時それぞれでの NPO の役割が説明され、防災庁設立への有識者報告書にもふれ、生協には企業や NPO、社協、行政と並ぶ独自の存在/役割があることを強調されました。

（参加者アンケートより）：災害の際に生協は支援に駆けつけていますが、近年は近隣の生協と一緒に炊き出し訓練を行うなど災害に協力して対応していく訓練をしています。様々な講習会や研修などの際に NPO の方との情報交換の場があるとよいのではないかと思いました。

質疑・意見交換

「地域社会に足場を置いて考える重要性と難しさ」「組合員の共感性と協同組合における民主的合意形成の大切さ」「理念を政策にどのように反映できるか」「政府文書に協同組合が登場しないのはなぜか」など、率直な意見交換がされました。

（参加者アンケートより）：生協、農協、NPO とそれぞれ立場や環境が違うけど目標（ゴール）は同じ方向を向いていると感じました。協同組合と一言で言ってもいろいろな形があると思います。住み慣れた地域でいつまでも明るく元気に過ごすこと＝しあわせになるのかと感じました。

（むかい　しのぶ）

7月から、コープぎふ・あいち・みえ・大学生協が参加する職員の学びの場が始まりました！

報告　駒井　義明（地域と協同の研究センター専務理事）

７月３日（木）協同の未来塾

協同の未来塾とは・・・

第1期は2014年に開講しました。当時の各生協から協同組合を理論的に学び合い、研究しあう場づくりをと期待する声が各生協から研究センターに寄せられ、それぞれ委員を出してもらって一緒に、構想と開講計画を練り上げ、始まったものです。この塾は、生協人としての理想を持ってもらいたい、理論と実践を統合した視点を持ってもらいたい、常にミクロとマクロの2つの視点をもってもらいたい、主体的に試行し、参加した仲間と一緒に考え合ってほしいと組み立てをし磨きながら10年を超えて開催してきたものです。

講師陣としては、協同組合学会の会長で関西大学教授の杉本貴志先生、中京大学元教授の小木曽洋司先生、金城学院大学教授の朝倉先生、名古屋市立大学名誉教授の向井清史先生、日本福祉大学元教授の近藤充代先生、阪南大学教授の加賀美太記先生、そして、名古屋文理大学助教の岩橋涼先生に新しく加わっていただきました。大学の先生だけでなく社会課題、地域課題と向き合う岐阜県各務原市（八木山地区社協ささえあいの家）の清水孝子さん、愛知県東栄町の加藤彰男さん（東栄町議会議長）にもお願いしています。多彩な講師陣で掲げたミクロとマクロ、理論と実践を深めあっていきます。10月末には、コープこうべの施設である「協同学苑」に1泊2日で行ってきます。

第1単元は「協同組合論と協同組合の哲学」

特別講義「持続可能な食と農をめざす生協産直とは」

午前中は特別講義として開催、講師は岩橋涼先生でした。岩橋先生は名古屋文理大学フードビジネス学科の先生ですが、京都にあるくらしと協同の研究所の活動に院生時代からかかわっておられ、その縁でご紹介いただいて、講師をお願いできました。全国の生協の産直の割合、産直3原則と5基準などほぼ共通した基準で運用されているが、取り扱いは生協によって異なること。農業者の減少や高齢化など農業が抱える問題。政府の政策の現状、そして、生協産直がめざす方向性。そして持続的な地域農業に有機の取り組みが大切であり、それを励ます生協組合員との産地交流が重要な意味を持つと話されました。参加した職員からは、産地とつなぐ役割を生協が持つ、商品を知ってもっと利用してもらおう、生協としては直接会う機会の少ない組合員にどう伝えるか、などの意見が出され、深め合いました。

岩橋　涼先生

第2単元は「協同組合論～協同組合のアイデンティティと東海の協同組合」

午後からは地域と協同の研究センターの代表理事補佐である向井忍さんの講義です。昨年までは、兼子厚之さんが講師をつとめていました。協同組合のアイデンティティの見直しをリードし、東海の協同組合の歴史をていねいに調査してきました。東海の協同組合、生協には歴史があるが、それは人々が厳しい時代に向きあった際の助け合いたいという思いの発露であり、そういった人々の精神が今につながっていると感じさせるような講義でした。

向井　忍代表理事補佐

参加した職員からは自ら考えること、利用者の立場に立って考えることなどへ昇華されていました。

Cooperatives Build a Better World
7月14日、2025国際協同組合デー愛知を開催しました（速報）

愛知県では、JA 中央会、生活クラブ愛知、東海労働金庫、国民共済coop、大学生協、南医療生協、北医療生協、コープあいちなどが参加している「協同組合ネットあいち」という組織をつくっています。地域と協同の研究センターはその事務局をしています。この日はその主催で、31の協同組合から120人が参加して、第1部では国際協同組合年として協同組合のアイデンティティについて国際的な協議がされておりそのことを学びました。第2部では4つの分科会に分かれ、各組織の役職員が意見交換したり、これからの一緒に何かできないかなどを考え合いました。

中村哲さんの映画から考え合った第4特別分科会

HOMI わいわい農園見学交流会を開催

主催：三河地域懇談会世話人会　　報告：伊藤小友美（事務局）

豊田市保見地区において、多様な国籍、年齢、性別の住民が、農園での共同作業などを通して、地域交流を深めることを目的に、２０２２年４年１月に発足したのが「HOMI わいわい農園の会」です。中京大学や NPO 団体と連携し、年齢や国籍を超えた交流に取り組んでいます。その代表森賢一さんはめいきん生協の元職員で、アジア・ボランティア・ネットワークの事務局長も務められた方です。

三河地域懇談会世話人会では、農・食・健康を大きなテーマの一つに掲げ、豊橋市のえざね協同ファームの応援もしています。そして 3 月 23 日（日）に「HOMI わいわい農園」見学交流会を開催しました。三河からの参加者は 6 名でした。日系ブラジル人の方、小さなお子さんを連れた家族連れの方など合計 36 名で、楽しいひと時を過ごしました。

最初に、斎藤尚文さんから「HOMI わいわい農園」の 2 年間の活動について趣旨や経過、現状や課題などの説明をいただきました。「私たちが目指しているのは、多文化共生と市民交流！」という言葉がとても印象的で、共生社会づくりに向けた情熱・意気込みが強く伝わってきました。会員は保見団地の住人が多いのですが、近くの中京大学の中野歩美先生のゼミの学生も木曜日の午後、農園に通っています。中野ゼミでは、文化人類学の視点から、多様な文化的背景を持つ人たちがどのように交流し、共生していけるかというテーマについて、実践を通して考えていくとのことです。

花の苗をみんなで花壇に植え、ピカーニャ牛肉などの焼き肉、おにぎり、総菜などで、バーベキューを楽しみました。ブラジルの歌姫の独唱も素晴らしく、歓談と交流が大いに弾みました。

参加者の感想

◆　わいわい楽しくやっている典型だと思いました。豊橋や新城にも外国人が多い。今後、いろんなつながりができればいいと思います。

◆　外国の人と初対面で近づいて、フレンドリーに食べることで結び付いたと思います。多文化共生を身をもって体験することができました。私たちのまわりでそんな場をつくるのもいいかと思いました。人と人のつながり・活動のつながりの強さに改めて感心しました。

◆　家族連れで楽しんでいた方があり印象的でした。お花の苗を植えている子どもたちがとても楽しそうでした。

◆　畑は限られた条件の中で楽しく試行錯誤されているようです。人と人とのつながり・組織との連携は森さんのリーダーシップによるところが大きいと感じられました。参加されている皆さんが、老若男女、明るく陽気で笑顔が溢れているのが素晴らしい。

オマケの情報　えざね協同ファームの第１回総会が 5 月 18 日に開催されました。これまでの取り組みの報告があり、今年度の進め方を確認しました。２０２５年度は毎月「農食・元気交流会」を開催し、えざね協同ファームで「非日常」を楽しむ会員を増やす努力をします。来賓の恵実生産者グループ代表の安藤成彦さんからは、「この 50 年で 7 月の平均気温は 4℃上がっている」とのお話がありました。二酸化炭素の排出量は 3 倍になっているそうです。恵実生産者グループは環境保全型農業に取り組んで半世紀になります。これからもご指導いただき、協同ファームの活動に取り組みます。

（いとう　こゆみ）

難民食料支援を通じた多様性への配慮と協同のプロセス

神田すみれ（地域と協同の研究センター研究員）

ＮＰＯ法人名古屋難民支援室、アジアボランティアネットワーク東海、地域と協同の研究センターの３団体共催と生活協同組合コープあいちの協力で、第９回「難民食料支援 仕分け発送」を開催しました 。大学生 20 名を含む 43 名のボランティアが参加し、12 世帯の難民の方へ食料品や日用品を届けるため、心を込めて仕分けと梱包を行いました。

発送された食品は、活動に先立ち６月 30 日から７月４日にかけて実施された「食料支援 第 14 回」のフードドライブで集められたものです 。地域の方々、名城大学や名古屋外国語大学で「ボランティア」の授業を受講する大学生の皆さんから寄せられた食品は多岐にわたりました。これらの品々に加え、手書きのメッセージカードも添えられ 、難民の方たちへの思いを乗せて箱詰めされました。

参加者は４チームに分かれ、各チームで人数、宗教、緊急度の異なる３世帯を担当しました。並べられた多くの品々は種類も数量も様々です。そのため、各チームは担当世帯の状況を想像しながら話し合い、公平に食料品を分け合うという協同作業に臨みました。全チームが揃う前に品物を確保しようとしたり、一つのテーブルでの分配に時間を要したりと、試行錯誤の連続です。このプロセスは、多様な背景を持つ人々同士でお互いを理解し合い、限られた資源をいかに分かち合うかという、参加者一人ひとりの考えが現れる貴重な学びの機会となりました。

今回の食料支援も、参加者一人ひとりの温かい気持ちと協力によって、無事に 12 世帯へ思いを届けることができました。同じ地域で暮らす同じ市民として、難民の方たちと共に進めるこの取り組みにぜひ加わってみませんか。皆さんのご参加をお待ちしています。

参加者の感想

- 大学生の学びの場として、学べる機会を創出できていることはいいと思う。若い世代がこうした場に参加することで、難民支援の活動に興味を持ってもらい他のイベントにも多くの人が参加していただけるとありがたい。
- 難民の人だけでなく他大学の人とも話すことができてよかった。
- ハラール対応に動物油脂、ゼラチンも含まれることに驚きました。思っていたよりも分けるのが大変で新鮮でした。
- 実際にボランティアに参加して難民の方々と交流することで、難民問題を身近に感じられたし、どんな人々が困っているのかがわかった。彼らが安心して日本で過ごせるようにもっと積極的にボランティアに参加しようと思った。
- 初めてのボランティア参加で緊張していたのですが、温かい雰囲気でとても安心しました。 またあれば参加したいです。
- 移民の人が好きな食べ物など、たくさんのことを知ることができました。
- 参加者の皆さんは優しくフレンドリーで会話が楽しかった。

刺繍の活動と難民食料支援のつながり

研究センター会員　高桑樹里

2024 年８月に刺繍展を初めて開催し、ワークショップを行ないました。瀬戸の商店街で「刺繍の世界で手をつないで～世界平和への祈り～」というテーマで、刺繍やアートを通して平和を考える機会を作りました。その後、瀬戸市の商店街で開催される「銀座生き生きマルシェ」や生活クラブ生協尾張旭センターの「尾張旭つながるマルシェ」に参加しました。また、刺繍展でお会いしたクリスチャンの方に声をかけていただき、名古屋市白壁にある名古屋セントラル教会で刺繍のワークショップを行い、刺繍作品の展示も行いました。刺繍作品を制作する中で、端切れの刺繍糸たくさんありました。捨てることは簡単ですが、もったいなく感じて、空き瓶に入れてサンドアートのように飾っていました。それでも、どんどん溜まっていくばかりでどうしようか。何か良いアイディアがないだろうかと思い、あるアーティストの方がペイントでハートをモチーフにアートパフォーマンスをされていていました。そこからインスパイアされてポストカードに、色々な色の刺繍糸でハートを作ってみました。また、難民食料支援の間にマルシェに刺繍店を出店していたので、そこでカードが売れたら、売上の 10%を寄付しようと考えました。商品にも、説明文をつけて販売することにしました。教会での刺繍作品の展示会で、数名の方に刺繍作品を購入していただいたので、その際の売上からも寄付させていただきました。これから取り組み始めた企画なので、まだまだ少額でしたが少しずつ広げていきたいと思います。私が、生活支援に携わったご家族も、刺繍が好きで、伝統的な衣装を製作されていました。引きこもりがちな女性たちがメンタルヘルスの問題を抱えているというお話を聞いたので、刺繍の会を企画して、女性たちがお家の外へ出て、安心して刺繍をしながら人と話す機会を作りたいと考えています。

情報クリップ

co･opnavi　2025.7　No.878
若い世代に安心を提供するＣＯ・ＯＰ共済
日本生活協同組合連合会　2025 年 7 月　Ａ４判　32 頁　363 円（消費税込）

＜私たちの「この一枚」＞　生活クラブやまがた生協
８年ぶりの開催　「わくわくフェスタ」
専務理事　早川　亘

特集
若い世代に安心を提供するＣＯ・ＯＰ共済
＜今日も笑顔のコープさん＞　セイコーエプソン生協
＜想いをかたちに　コープ商品＞
ＣＯ・ＯＰ炭火やきとりねぎま串（振り塩）
＜生協大好きママコプ山さんの　教えて！ＣＯ・ＯＰ商品＞
ＣＯ・ＯＰアーモンドリーフ
＜２０２５国際協同組合年＞
（ＩＣＹ２０２５）を知る
＜組合員に支持される店づくり・売場づくり＞
みやぎ生協・コープふくしま
＜日本全国宅配現場におじゃまします＞
パルシステム神奈川
＜本田よう一のいつもの台所＞
＜明日のくらしささえあうＣＯ・ＯＰ共済＞
エフコープ
＜この人に聞きたい＞
俳優　石田ひかりさん
＜ほっと navi＞
京都生協　／　コープみえ

生活協同組合研究　2025.7　VOL.594
どうなる、日本のコメ
公益財団法人　生協総合研究所　2025 年 7 月　B5 判　80 頁　定価 550 円（消費税込）

巻頭言
「営利」・「非営利」と社会的課題　中島智人
特集　どうなる、日本のコメ
米価格高騰の背景　－米流通制度改革への示唆－
中嶋康博
米をめぐる消費と生産を振り返る：
令和の米騒動を契機に　生源寺眞一
北海道産米の歴史と昨今の状況　小池（相原）晴伴
ポスト生産調整・ポスト減反に向けて必要な視座
小川真如
生協産直・事業におけるコメ
－事業上の困難と活動上の重要性－　大木　茂
■IYC2025 の機会に協同組合の価値を再考する（第4回）
アジアで活躍する非営利組織・市民組織による組織づくりの価値－アジア生協協力基金一般公募助成事業の成果より－　宮崎達郎
■国際協同組合運動史　（第 40 回）
1963 年 ICA 大会②～1966 年第 23 回ウィーン ICA 大会
－新原則をめぐって－　鈴木　岳
■本誌特集を読んで（2025・5）
梅津寛子・五十嵐雄悟・生田園深
●生協総研賞「第 23 回助成事業」の応募要領　（抄）
●全国研究集会「超高齢社会において
生協が果たすべき役割を考える」（11／21）

文化連情報　2025.7　No.568
厚生連医療機器全国連携協議会の設立とその意義
日本文化厚生農業協同組合連合会　2025 年 7 月　B5 判　64 頁　文化連情報編集部 03-3370-2529＊注

農協組合長インタビュー（105）　玉名農協
生産者と消費者を結ぶ「きらめき発信」　久保英広
厚生連医療機器全国連携協議会の設立とその意義
佐治　実
赤ひげ大賞受賞
インタビュー　地域の真ん中に足助病院がある魅力
早川富博
レポート　病院発の「地域課題解決会社」とともに
河原林孝由基
薬価制度、医薬品流通の現状と問題点　(2)
メーカーの独占的価格管理の是正を　佐治　実
広島総合病院　ロボット支援手術（ダヴィンチ）を投入して 1 周年のご報告　佐々木　秀
インタビュー　2025 国際協同組合年　(IYC2025)
誰一人取り残されない社会の実現を　原　穂高
協同精神のリレー　(28)
日本共済協会での協働　伊藤澄一

二木教授の医療時評（233）
診療報酬単位が１点１０円に固定された経緯をさぐる
二木　立
農高生と地域を作る
～我はいかにして農業高校教員となりしか～　(6)
農業高校縮小の動きと、佐野高校農業科の廃止
橋本　智
「医工連携」が拓く医療技術イノベーション　(12)
臨床結果と謙虚に向き合うことが、
新医療機器開発に必要なプロセス　梅津光生
多様な福祉レジームと海外人材　(83)
妊娠を理由とした契約の終了に関する実態　安里和晃
全国統一献立
新潟県の郷土料理　きりざい　小林紀子
臨床倫理メディエーション（82）
権威者・権力者に必要な倫理的思考と態度
－2 つの刑務所実験から　中西淑美
□自著を語る
労働者組合とは何か
連帯経済とコモンを生み出す協同組合　松本典子
□書籍紹介
図解　知識ゼロからの協同組合入門
▸線路は続く　(198)
大阪モノレールで空中散歩　／　西出健史
▸最近見た映画
国宝　／　菅原育子

国際協同組合デーのとりくみ報告

石橋 一郎（地域と協同の研究センター事務局長）

国際協同組合デーは、1923 年以来 ICA によって世界的に取り組まれており、毎年 7 月の第 1 土曜日と定められています。日本では各県ごとに各種協同組合が協力して取り組んでいます。岐阜では 2025 年 7 月 10 日に岐阜県協同組合間提携推進協議会主催の「協同組合に関する学習会」を、愛知では 7 月 14 日に「2025 国際協同組合デー愛知」で学習と交流が、三重では三重県協同組合連絡協議会が 7 月 17 日にワンコインコンサートに協賛、それぞれ行われました。

研究センターでは毎年、愛知県の協同組合デーの企画運営に協力していますが（P３参照）今年は国際協同組合年を記念して開かれた東京での国際協同組合デー・イベント「協同組合フェスティバル」に参加しました。その様子を紹介します。当日は約 4000 人の方々に参加いただきました。研究センターは全国の協同組合研究機関といっしょに合同出展し、研究誌「鶏頭」の特別配布（無料）、研究センター紹介の栞の配布を行いました。このブースでは各研究機関が持ち寄った冊子など 250 冊を来場者に差し上げました（主に各協同組合の組合員理事や職員が関心を示され、喜ばれていました）。

他にはＪＡ愛知東「地域ささえ愛組織」やＪＡひだ「ＳＵＮ・ＳＵＮ会」などが進める交流組織「協同の縁（えにし）」メンバーも出展し、地域物産販売と「協同の鐘」の展示、「協同の縁」の紹介を行っていました。

（いしばし　いちろう）

大学生協の学生委員さんも来場

協同の縁（えにし）も出展（「協同の鐘」）

会場風景

地域・協同の運動、協同組合に関する文献資料、協同組合・生協関係の研究所などの調査研究成果や研究センター会員の研究成果などから、比較的入手しやすいと思われるもの、寄贈いただいたもの(＊)などを中心に順不同で紹介しています（主な内容は目次等から事務局が要約しています）。詳細は研究センター事務局までお問い合わせください。

書籍紹介

地域と協同の研究センター井貝順子会員からの書籍紹介

コモンの「自治」論

著者:斎藤幸平　松本卓也　白井聡　松村圭一郎　岸本聡子　木村あや　藤原辰史

出版社:集英社　発行日:2023年8月　価格:1870円(消費税込)

戦争、インフレ、気候変動。資本主義がもたらした環境危機や経済格差で「人新世」の複合危機が始まった。崖っぷちの資本主義と民主主義。この危機を乗り越えるには、破壊された「コモン」（共有財・公共財）を再生し、その管理に市民が参画していくなかで、「自治」の力を育てていくしかない。

自助・共助・公助。この中で共助が劣化している。自助と公助は貨幣で得られるが、共助は貨幣では得られない。八木山ささえあいの家の活動は、介護保険では対応できないくらしの応援だ。共助に必要なのは自治であり、それも支える側と支えられる側が明確に分かれる形ではなくお互いに支えあう関係が必要。杉並区長の岸本さんの話。区民が自分たちで問題を発見し、政策までまとめた後、それに賛同する候補者を探すという、とてもユニークな自治。今までの国家から考えるトップダウン型ではなく、そこで暮らす身近な地域から課題を上げていく、「杉並区議会は四八議席のうち、女性議員が半数を占める・・・しかも当選した女性新人議員たちは、三〇代の保育士、四〇代の子育て中の母親、闘病生活の後に立候補を決意した五〇代のシングルなど、地に足のついた暮らしを送ってきた女性たちです」(p.114)。わたしたちが思い込んでいる自治と自由とは「税という対価を払って後は専門家にお任せする」という意味になってしまっているようです。

訃報：水野隼人さん（地域と協同の研究センター顧問）

７月６日、水野隼人さんがご逝去されました。80歳でした。水野さんは、地域と協同の研究センター設立準備委員を務められ、１９９５年設立と同時に運営委員（代表委員）に就任、２０００年度のNPO法人化にあたっては設立代表者を務められました。法人化に伴い理事に就任、２００５年度から２００８年度まで代表理事。２００９年度から現在に至るまで顧問として貢献いただきました。生活協同組合コープぎふ元理事長、全岐阜県生活協同組合連合会名誉顧問。当研究センター主催の「協同の未来塾」では若い職員に向けて、生協設立の息吹と連帯の意義を熱く語っていただきました。ご冥福をお祈りするとともに謹んでお知らせします。

右のQRコードから、
研究センターニュース
巻頭に執筆いただいた
記事がご覧になれます。

https://x.gd/OoxRm

右の写真は、
2019年9月28日
協同の未来塾(コープこうべ協同学苑)で
お話しいただいたときのものです。

研究センター８月活動の計画

5日（火）常任理事会
8日（金）三河地域懇談会
今泉秀哉（ひまわり農協）をお迎えして
19日（火）地域福祉を支える市民協同
29日（金）研究組織交流会
30日（土）友愛協同セミナー
　　マイスターコース第２回

地域と協同の研究センターの情報
下記QRコードからご覧ください。
ホームページ　facebook　インスタグラム

※企画は様々な事情で中止・延期・オンライン参加のみとなることがあります。
参加の前にホームページ等でご確認ください。

地域と協同の研究センターNEWS 第251号　　発行日 2025年7月25日定価200円（税・送料込み）
年会費には購読料が含まれています
発行 特定非営利活動法人 地域と協同の研究センター 代表理事　森 政広
〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通１－３９ TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315
E-mail AEL03416@nifty.com　HP http://www.tiiki-kyodo.net/